

## Wilde as a Critic of Arts

井村君江  
(明星大学教授)

オックスフォード在学中の Wilde が第2回目のイタリアとギリシャ旅行を行ったのは、1877年3月から4月末の1ヶ月半である。このあとアイルランドへ帰る途中ロンドンに立ち寄り、オープンしたばかりのグロヴナー・ギャラリーの開館記念展の絵画を観る。そして書いた美術評 '*Grosvenor Gallery*' を *Dublin University Magazine* (July 1877) に投稿する。活字になった初めての評論で、Wilde の出発は美術批評であった。

オックスフォードで Ruskin のイタリア美術や Pater のルネッサンス美術の講義を聴き、トリニティの Mahaffy 教授から実際のギリシャ、ヘレニズム美術文化を開眼させられていた Wilde。その基を辿っていけば、メリオン・スクウェア 1 番地の父 William の家のギリシャのレリーフの装飾を毎日見て育った Wilde が、美術や絵画へ向かったのは当然だったと言えるかも知れない。そして世紀末のロンドンには、多くの画廊が出現し、特色ある画家たちが競って作品を展示する爛熟した文化の渦中にあった。特にグロヴナー・ギャラリーは、伝統的な絵画の登竜門であったロイヤル・アカデミーの保守的な枠に捉われぬ秀れた才能ある画家たちに展示の場を与えようと、Sir Coutts Lindsay が設けたものである。

Wilde の美術評は短いものであるが、そこに記述されている名前及び寸評からは、かれがこれ迄に得ていた知識と背景、そして特色ある審美眼が覗えてくる。「Burne-Jones と Holman Hunt はおそらくイギリスに於て、色彩の巨匠と言えるだろう」と言い、Watts の想像力とその独自性を Michael Angelo (原文のまま) にたとえ高く評価する。そして Millais と Leighton, Rossetti と Morris (更に Ruskin) に言及するが、これらの画家はラファエル前派に属し、ロイヤル・アカデミー派より逸脱して Ruskin が弁護し高く評価する画家たちである。Wilde と P. R. B. の画家たちとの出会いは、すでにオックスフォード在学中だったのである。しかし詩作品の上でも P. R. B. のとくに Rossetti に惹かれ影響すら受けていた Wilde は、1882年頃になると、「P. R. B. 一派からの脱皮は、審美的運動に新しい時期を画するものだ」と言ってその影響から意図的に抜けていく。

この評論で言及され初期の Wilde が絵画の考え方の上で最も影響を受けるのは Whistler である。ギャラリーには No. 4 *Nocturne in Black and Gold* と No. 6 *Nocturne in Blue and Silver* が出品されており、「最初の作品は真黒な空に緑と赤の火を炸裂させ、

黄金の雨を降らせる花火で、画面の二つの大きな黒いしみは、クレマーン公園の塔と見物している群衆を描いたものと思う」と書いている。この作品は Ruskin が「公衆の面前に絵具つぼを投げつけて 200 ギニー要求した」と言った為 Whistler が訴え、裁判の結果 Ruskin が敗けて罰金を払ったいわくつきの作品である。「これらの絵は確かに鑑賞するだけの価値があるが、実際の花火が見える時間、つまりたかだか15秒ぐらいの間である。」先の訴訟事件が起る前であるのに Wilde のこの皮肉な筆は、かれが存外、古典派の美術を好み、新しい絵画に反撥する感覚を持っていたことを示しているようだ。

しかし新しい芸術論を掲げ、それを絵画に奔放な警句にと表現していた Whistler に Wilde は染っていき、*Symphony in Yellow* や *Impression du Matin* といった色と形と線の交響楽のような Whistler の絵画ふう印象詩を作り、Whistler が室内装飾をした家に住み、アメリカ旅行中のインタビューでは Whistler を自分の Hero であるとさえ答えている。しかし1885年の評論 *Mr. Whistler's Ten O'Clock* では、「日々の生活に於ける美の価値に関しては、Whistler 氏とはまったく意見を異にする」と断言し、画家だけが絵の価値がわかるのではない、「詩人が最高の芸術家だ」と言って剽窃呼ばわりをする Whistler と袖を分つのである。

「すべての芸術は音楽を憧れる」とした Pater の芸術観と同じものを Whistler の純粹絵画空間の主張に見ていた Wilde は、P. R. B. たちの生活の美化に共感を覚えて、*House Decoration* や *The English Renaissance of Art* (1887)、そして *The Relation of Dress to Art* (1885) 等を書き、自分の審美的服装にそれを表現した。もともと音楽的感受性の乏しかった Wilde にとって、絵画は芸術論展開の上で大切な媒体であった。評論集 *Intentions* (1891) 解釈のための重要な糸口が、これら初期の美術批評の中に見出されるのである。

### 海外情報

#### —Wilde の残り香—

井村君江  
(明星大学教授)

「かれはヴィクトリア朝の人たちよりわれわれの世界に属している」Richard Ellmann の伝記 *Oscar Wilde* の最後の章の言葉である。「われわれの世界」に視点を据えヴィク